蝶と蛾 *Tyô to Ga*, **35** (2): 91-92, 1984
Short communication

ツマキチョウの産卵部位

三　枝　豊　平

九州大学教養部生物学教室
〒810 福岡市中央区六本松

Oviposited position on a foodplant, *Rorippa indica* (L.), in *Anthocharis scolymus* (BUTLER) (Pieridae, Pierinae)

Toyohei SAIGUSA: Biological Laboratory, College of General Education, Kyushu University, Fukuoka, 810 Japan

ツマキチョウ *Anthocharis scolymus* (BUTLER) が，ハタザオ，タネツケバナ，イヌガラシ等の花穂に産卵することは周知の事実で，白水・原 (1960) は"通常食草の花穂に1個ずつ",福田・他 (1982) は"原則として食草の花穂や蕾などに1個ずつ"産卵すると述べている.

筆者は，1984年5月1日に，福岡市中央区六本松の九州大学教養部構内の圃場に自生しているイヌガラシ *Rorippa indica* (L.) の約20株に産卵されている本種の卵35個を採取して，その産卵されている部位を調査した．その結果は下記の通りであった．1) 花穂の頂部より2.5cm以内の茎，2卵（6%）；2) 枝頂に近い葉長2.1～2.8cmの葉（裏面3個，葉縁1個），4個 (11%)；3) 若い果実 (9.5mm) の柄の中央部，1個（3%）；4) 開花前後の花または蕾の花梗（基部～花梗長1/3の間10個，中央部6個，先端部1個)，17個 (49%)；5) 未熟の花穂に付随した葉長1.5cm以下の葉の裏面，3個（9%）；6) 未熟の花穂の蕾（ガクと花梗を含む)，8個 (23%)．(図1の番号は上記1)～6)の番号に相当する.)

これらの卵はいずれも橙黄色に変色しており，また調査日の前の4月29，30両日は天候が悪く，本種の活動はほとんど認められなかったことから，3日～1週間位前に産卵されたものと推定できる．この間にイヌガラシの花がどの位生長するかは不明であるので，産卵時における花，蕾の生育程度は分らない.
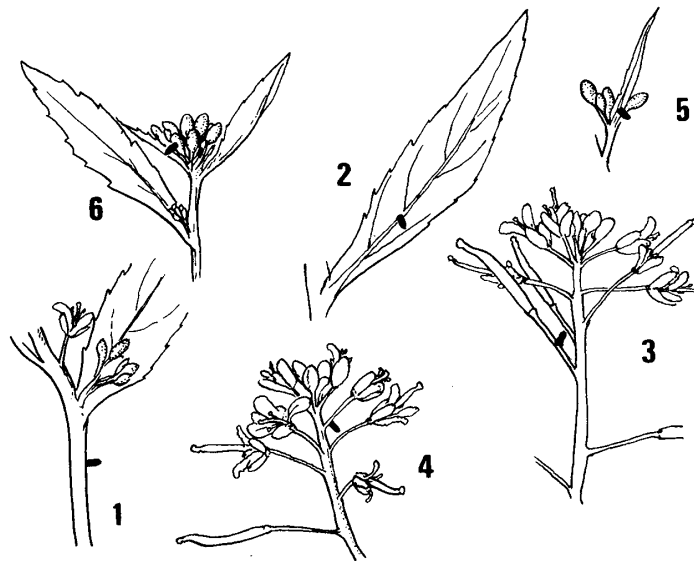
図1．ツマキチョウのイヌガラシ上の産卵部位.

表1. ツマキチョウのイヌガラシ上の産卵部位と産卵頻度.

	産卵部位	卵数(%)		
1)	茎(花穂の頂部より 2.5cm 以内)	2(6)		
2)	葉(枝頂に近い葉長 2.1〜2.8 cm のもの)	4(11)	裏面3	
			葉縁1	
3)	若い果実の柄(中央部)	1(3)		
4)	開花前後の花又は蕾の花梗	17(49)	基部〜花梗長1/3	10
			中央部	6
			先端部	1
5)	若い花穂に付随した葉の裏面(葉長 1.5 cm 以下)	3(9)		
6)	未開花の花穂の蕾(ガクと花梗)	8(23)		

しかし，4)〜6)を合計すると，総卵数の8割は開花前後に達するまでの様々な生育段階にある蕾又は花に産卵されており，蕾の生長が進んでいる場合は，産卵はガクや花弁をさけて，花梗だけに限定されていることがわかる．また，葉や茎など，可食部以外にも産卵が認められたが，これは2割以下であって，本種の好適な産卵部位ではないと判断される．

本種の産卵位置は1令幼虫の可食部である若い果実に最も近い位置で，かつ安全な成熟花蕾の花梗部が最も好まれていることが分る．本種の産卵行動の詳細が不明であるので，どのようにして上記の産卵部位が選択されるかは論議できないが，*Pieris*, *Colias*, *Eurema* 等の食葉性シロチョウ科の蝶に比較して，より入念な産卵部位の決定が行われるものと考えられる．

文献

福田晴夫・浜 栄一・葛谷 健・高橋 昭・高橋真弓・田中 蕃・田中 洋・若林守男・渡辺康之, 1982. 原色日本蝶類生態図鑑, 1 : 202–204, 保育社, 大阪.

白水 隆・原 章, 1960. 原色日本蝶類幼虫図鑑, 1 : 27, 保育社, 大阪.